

DENMARK

Archives recyclées

Marcel DALOZE による評論

DENMARK

1950年 アントワープ出身。

1968年から1972年の間、 Gent University (Gent University) に通い、芸術史と考古学を学ぶ。

アントワープにて制作活動を行っている。(1989年時点)

ペーパーワーク

本など虚無である！何も学ぶ事などなければ信じられるものもない。フィクションであれば存在などしない想像世界の虚構の人物たちについて書かれ、ノンフィクションともなると更にたちが悪い。教授たちは互いを馬鹿にし合い、哲学者たちはののしり合う。みな互いの足の引っ張り合いをしているだけであり、後には何も残らないのである。

レイ・ブラッドベリ，華氏 451 度 (Ray BRADBURY, *Fahrenheit 451*)

アーティストというものは、多かれ少なかれ世界に対して自身の明確な視点を持っており、私たち人類が共通して持っている”恐れ”を、常に作品に投影しているものです。

デンマーク (Denmark) は、本人いわく情報が不必要なまでに溢れており、社会を飲み込んでしまうのではないかと問いかけています。結局は紙くずとなる運命なのに、潮の満ち引きが起こるように発刊される新聞や雑誌、書類などを、私たちは本当に必要としているのでしょうか？

逆説的に、この社会は大量の廃棄物を生み出すと同時に、あたかも生の存続に必要な不可欠であると言わんばかりの、ありとあらゆる印刷物の保存活動に躍起になっています。

これら書物のアーカイブは、抽出され、集められた知識で満たされたボトルがどんどんと運び込まれ、膨れ上がったワインセラーのようで、まるで紙が私たちの文化の外面的な象徴に取って代わったかのようです。

こういった見方は著者の見解であり、デンマーク本人と共通の考えというわけではありませんが、デンマークにとっての印刷物とは廃棄物と同等のものでしかありません。

当然ながら、デンマーク本人が過去を大切に残さない人間である、と言いたいのではなく、むしろ彼自身は自らをアーカイバルアーティスト (archival artist) として捉えています。とはいえ、デンマークの作品には、\*タブラ・ラーサ (tabula rasa) の本来の概念に着想を得た肯定的で精神的な特質がある事に疑いの余地はありません。仮に疑う余地があったとしてもデンマークは、ハクスリー (Huxley) 著の、『すばらしい新世界』(Brave New World) で描かれている、(全体主義体制の間でよくありがちな) 徐々に衰退し、押し付けられ、朽ち果てた幸福と見なされた文学への聖戦の苦しみを共有するなどという事はありません。

デンマークの革新的な姿勢はブラッドベリの懸念と対立するものではなく(1)、デンマークの容赦ない刃は、彼の目から見て無意味に写る、見せかけの文化の俗物根性や、書物に見受けられるがつつがつつした強欲さに向けられています。彼自身は自らについて、コンピュータの出現によって人間性が押し流される危機が生じたときのゲーテンベルクの世界のロマンチックな支持者であると考えたいのです。

\*タブラ・ラーサとは、古くはアリストテレスの書物にも登場する、人は生まれ落ちたときは何も知らず、後の経験によって知識を獲得するという経験主義の考え。

制御の効かなくなった情報の発達と、いわゆる過度の学術的出版物によって息の詰まったデンマークは、自身のアーカイブを一部の鑑賞者へ批判反響を引き起こすような彫刻やインスタレーション作品へと転換させることを決意しました。

文化価値のある品は、それが一つの彫刻作品へとかたちを変える前の本来の機能を取り払われています。むしろデンマークは、まさに彼自身が問いかけていた素材そのものと戯れており、主要な素材は木と紙の関係をすぐさま呼び覚ますものに留まっています (2)。

その構造の困難さ故、場合によって裂かれ、水平に切られ、丹念にまとめられた紙は、生涯を写本に費やす年老いた僧侶たちを思い浮かべさせます。他では、大量の日曜日版新聞は、丸められたり積み重ねられ、まるで森の中の薪のような勾配として展示されました。

デンマークは、例えば雑誌の 1 ページを限り無く小さく折り畳み、全く重量がないかに見えるような作品から、シュレッターに掛けられた膨大な量の新聞紙の作品まで、両極端の端から端までを軽々とスキップするかのよう飛び越えてゆきます。

また、ストリップ状に切り刻まれたコンピュータプリントの束を展示する為に図書館の本棚や資料用の棚を使用したり、絶え間なく増大する出版頻度で売店を浸水させてしまいそうな勢いの雑誌を塵にし、瓶詰めされた、飲む事の出来ない情報を発酵させたりもしました。

また、各国数百もの新聞に掲載されていた同一の情報を使いバトンのシリーズを作り上げました。それは、半旗の位置にメートル単位で掲げられた旗のような作品でした。

後にデンマークは、33 トンの梱包された新聞を、アントワープ現代美術館 (*Museum of Contemporary Art in Antwerp*) の正面に配置しました。この教化の様は、後に追加された 8 トンの石の固まりによってさらに誇張されました。

デンマークは、“プレス”という言葉の文字通りの意味に多大な重要性を置いています。印刷物は後に、すべて重しの下に置かれるか、接着による固定を逃れる事は出来ません。まとめてプレス機にかけられるだけでなく、裁断され、破壊され、粉々にされ、接着され、束ねられます。文字に命を与え、意味を明らかにする役割を担うインクでさえも、表面全体が汚され、印刷物を判読不可能な状態にしてしまいます。

最終的に、この活発なリサイクル行為はアーカイブという根本的なコンセプトを否定しています。デンマークの彫刻作品は、文字通り理解不能で、尚かつポール・バレリー (*Paul Valéry*) の言うところの“解読不能のモニュメント”を構成しています。

専門的に言うならば、このコンセプトは完璧なテクニックによって表現されています。全くもってありふれた対象物を、鋭い美的感覚を持ったアーティストがきわめて繊細に、真の美術作品へと創り変えてしまっているのです。

作品の冗談じみた特性にも関わらず、デンマークの彫刻は、何百も儀式的な表現方法として折り畳まれた反復を通して深い感動すら呼び起こします。

過剰な出版は、私たちがそれら一つ一つにきちんと向き合う、あるいは把握する事を不可能にする一方で、過分の情報は私たちが問題点の取掛かりを掴む障害にすらなります。それはまさに、ムンクの叫びがデンマークの作品の中で響き渡っている様です。私たちはアーカイブを作り上げることによって恐れを沈めようとしています、デンマークは“知り得ない事から打撃を受ける事はあり得ない”と鋭い一言を返します。

マラルメ (Mallarmé) は、何も書かれていない紙切れを見たとき体が麻痺してしまったといえます。—*La clarté déserte de ma lampe Sur le vide papier que la blancheur defend* (ランプから落ちる光の明瞭さが、空白の紙の“白さ”を際立たせる)—彼の詩は徐々に欠乏や無に浸食されていきました。(3) デンマークのマラルメにおける隠者性に対する同情心は、イヴ・クラインの非物質性に対する彼の感情と同じく、話の内容や既に死に絶えている過去の重さから解き放たれたいという願望により説明されています。デンマークが奮闘している空虚というコンセプトは、新聞売り場や図書館の本棚や郵便受けなどに毎日山積みになっている印刷物の確固たる蓄積と完全に対比関係にあります。

デンマークは、彼を展示に招待した学校という特定の環境 (4) に自分自身を順応させるため、知識のもう一つの盲点を攻撃しました。過去の仕事や、教えられ (おそらく) 吸収されたであろう題材の、何トンもの包括的な紙の証人である学校の記録は、毎年保存され続けます。デンマークは、この蓄積されファイリングされた知識を慎重に折り畳んでギフト用包装紙にしたり、圧縮して実際には使用される事の無い試験用紙の山に作り変えたりしました

文化はそれ以外のものが全て忘れ去られた後に残存する物だけを指すのでしょうか？デンマークは、すべてをコントロールしたいという執着心を公然と非難するのと同様に、不必要な本の知識の無益さを残念に思っており、彼自身の学生生活を、全寮制学校での美術史専攻の大学教育に追われる耐え難い日々であったと回想しています。博学的な知識の蓄積に疲れ、彼は自らの教育の年月にページをかぶせ、いくらかは埋め、その他は川に投げ捨ててしまいました。

後に彼は、真実とは (これも情報のようなものですが) 相対的である、という事で納得し、現代の主要なムーヴメントや人物について書かれた美術本の偽の図書館を創作しました。図書館と言っても偽物で、本棚に入っていたのは実在する本のタイトルを掲げた背表紙だけでした。彼の問題提議はいくつかの側面を持っていました。それは私たちの社会のスターたちによって陥れられた偉大さの錯覚、豊かさの表面的な罨である文化や中産階級の図書館に対する慢心、そして虚しく空の装備品と化したボルヘス (Borges) の知識の迷宮に異議を唱えるものでした (5)。

若かりし頃のモンテーニュ (*Montaigne*) は、人間はいかなる事においても確信を持つ事など出来ないと結論づけています。この懐疑主義的なものの見方は、寛大さや謙虚さ、そして忍従をもたらしました。あえて、「私は何を知っているというのだろうか?」と問いかけるモンテーニュの明晰さと同様、デンマークは、苛酷で不健康、もしくは過剰なまでの情報の波の下で窒息しかけている過負荷をかけられた私たちの頭を不本意であると思っており、先述の通り、知識の詰め込み過ぎ症候群の危険性を警告しているのです (6)。

*Laissez parler les petits papiers* (その小さな新聞に語らせてあげて) と歌にありますが、デンマークの無言の図書館ではその声は完全に遮断されているのです。

Marcel DALOZE

- (1) 華氏 451 度とは、本が燃えて消滅してしまう温度。著者は、文学が禁じられ、消防隊員の役割が逆説的にも本を燃やす事へと変換され、知識が容疑と化してしまった世界を描いています。背景にある論理は、“本は何たる裏切り者であろう！本が諸君の考えを裏付け、興味を引くものであると考えているのだろうが、諸君以外の輩も本を用いる事が出来るのだぞ。となるとほら見たことか、諸君は名詞や動詞、形容詞が混在する荒野に自らを見失ってしまうのだ。”というごく簡単な真理に基づくもので、燃やすよう命じられた本を読み始めてしまった頑固なヒーローであるモンターグ (*Montag*) は、文化が基本的人権と位置づけられ、満喫されていたが失われてしまった世界を夢見ます。しかし結局モンターグは、危険な犯罪者と見なされてしまうのです。
- (2) library (図書館) やフランス語の *livre* (本) に見られる *liber* はラテン語で、元は木と木の皮との間の薄い層を意味する語彙。
- (3) “空虚さの轟く廃止された骨董品 “ (*Aboli bibelot d' inanité sonore*) ”  
(1887 年 マラルメ 著 “*Ses purs ongles très haut dédiant leur onyx...*” より引用)
- (4) 1989 年 11 月 “*Archives recyclées*” *Centre d' Art Nicolas de Staël, Braine-l'Alleud (Collège Cardinal Mercier)*
- (5) “あらゆる直接的陳述の思慮深い一節には必ず愚鈍な不調和音や口述的乱筆、または思考の乱散が含まれる事は既に周知であるが、書物に意味を見出す事を、夜夢だのカオスのごとく入り組んだ掌の皺だのに意味を見出すなどという虚栄心が強く迷信的な行為と同等視する習慣を否認する司書どものいる無骨な国を私は知っているのである。” (ホルヘ・ルイス・ボルヘス (*Jorge Luis BORGES*) 著 “バベルの図書館” (*La Bibliothèque de Babel*) より引用)
- (6) 彼らはまるで、我々の耳に流し込むかのように叫び続け、止める事は無い。そして我々がする事とは、言われた事をただ繰り返すのみである。(モンテーニュ, エッセー)

翻訳：リムアート

このテキストは 1989 年出版の作品集 [Archives recyclées] に収録された評論を日本語訳にしたものです。このテキストを商用で使用、無断で転用することはお断りいたします。  
お問い合わせは下記までご連絡下さい。

150-0022

東京都渋谷区恵比寿南 2-10-3 リムアート

Tel: 03-3713-8670

e-mail: [official@limart.net](mailto:official@limart.net)